

# 松代藩士山寺常山の人物像形成と伝記資料

小関悠一郎

## はじめに

本稿は、近世後期の松代藩士・山寺常山（やまでらじょうざん、文化五年（一八〇七）～明治十一年（一八七八））について、現在に至るその人物像形成の過程を検討し、それを通して今後の山寺常山研究の視点と課題について考察するものである。これまで山寺常山については、早くからその学識が高く評価され、多くの文献で鎌原桐山・佐久間象山と並ぶ「松代三山」の一人として言及されてきた。また、近年ではその生家跡が山寺常山邸として整備され公開されていることもあり、松代藩関係の歴史人物としては大変知名度の高い人物であるといえよう。

では現在、私たちが接する山寺常山の人物像はどのようなものだろうか。この点について、例えば人名事典類の記述を参照すると、概ね次のようにまとめられよう（本稿末尾の参考資料1参照）。①佐久間象山、鎌原桐山とともに松代三山の一人である。②代々百四十石で真田家に仕え、父久敬が早世し、祖父久好に育てられた。③真田幸貫に仕え、監察、普請奉行、世子傳などの職を務めた。④江戸に出て、兵学を平山兵原に、経書を古賀洞庵に学び、松崎謙堂、佐藤一斎、中村敬宇らとも交わり、天保四年には儒者長野豊山を松代に招いた。⑤天保十二年幸貫が幕府老中となり海防を担当したことをうけて藩士に兵学を講じた。⑥天保十四年に郡奉行と

なり、幕府より功を賞され、弘化四年の善光寺地震の対応にも功があった。⑦安政元年の黒船来航時、佐久間象山らと開港問題に奔走し（長岡監物・藤田東湖らと画策）、文久三年の英国軍艦来航時は藩の参謀として江戸に赴いた。⑧明治三年の午札騒動では、藩知事真田幸民の下で登用された功があった。⑨著書に『常山文集』『如坐漏船居紀聞』『松代封内実測図』がある。

こうして見ると、山寺常山の事跡については、これまでである定度詳細に明らかにされてきているとみることができよう。ところが一方で、右に示した常山の事跡については、『更級埴科人名辞書』（信濃教育会更級教育部会、一九三九年）、さらには大平喜間多『松代町史』（松代町役場、一九二九年）にもほぼ同内容の記載が見られ、さらに遡ると、明治一七年（一八八四）の「常山山寺先生碑」（中村正直編、末尾参考資料2参照）がこれらの常山伝の原型となることが判明するのである。つまり、山寺常山の事跡・人物像については、その知名度に比して、明治一七年の「常山山寺先生碑」の内容がほぼそのまま踏襲され、現在に至っているのである。

このことは、例えば同じ「三山」の一人佐久間象山をめぐる研究状況と著しい対照をなすものといえよう。ここで注目したいのは近年、佐久間象山像の描かれ方や人物伝の成立事情、歴史叙述を担った人々に光が当てら

れ、明治期以降における歴史人物像抽出の動きが克明に明らかにされてきていることである。<sup>(1)</sup>これらは、明治期以降、松代内外で形成された人物像・歴史意識の解明につながるものとして貴重な成果であるといえよう。

本稿ではこうした研究に刺激を受けて、山寺常山像に関する研究の基礎となる史料の紹介に意を用いながら、山寺常山像の形成について考察してみたい。以下ではまず、常山について最もまとまった記述を持ち、本稿執筆の契機の一つともなった、飯島忠夫『山寺常山伝』（一九四〇年、山寺家文書山寺家文書I―七―一・二）を取り上げ、山寺家文書等を用いた常山研究の水準と課題について検討する。続いて、「常山山寺先生碑」に立ち戻って明治期における常山像形成の過程について述べるとともに、常山像形成を規定した要因として、幕末期にかけて常山が取り結んだ人的関係とその中で受けた評価について検討する。本稿での考察は、時間の制約からごく粗いものとならざるを得なかったが、近世後期松代藩での学問と政治をめぐる動向<sup>(2)</sup>が、幕末期以降の政治論や政策構想、さらには人々の歴史意識や地域意識にいかなる影響を及ぼしていくのか<sup>(3)</sup>、という点の解明に向けた一作業と位置づけ、考察を進めていきたい。

### 1. 山寺家文書と飯島忠夫『山寺常山伝』

これまで、山寺常山については、どのような研究が行われてきたのだろうか。この点、冒頭で述べたことから窺えるように、常山に特化した研究は極めて少ない。そうした中で、山寺常山関連史料の紹介や研究の機運をひとときわ高めたのが、昭和一五年（一九四〇）における常山顕彰の動向である。関連事業をあげておこう。まず同年一月、「常山山寺先生碑」の原本を元に新碑が建立され（場所は現在の山寺常山邸）、同月これを記念して『山寺常山先生年譜』（北澤正誠の「常山先生年譜」に常山碑文等を合わせたもの）刊行、同書発行日と同日の二十三日には松代小学校講堂

において飯島忠夫の講演「山寺常山先生に就いて」が行われた。<sup>(4)</sup>さらに二月には、早川春信『山寺常山小伝』が刊行されている。

『山寺常山小伝』が「先般常山の孫にあたる、塩野法相の大命を拜して帝国の経綸に参画せらるゝに際し、私かにそれを機会とし…此の編纂を企図した」と述べているように（早川春信「緒言」）、この一連の事業の背後には、常山の孫（山寺信炳の三男）で塩野宜健の養子となった塩野季彦（二八八〇～一九四九）の存在があった。塩野季彦は、京帝国大学法科大学独法科を卒業後、検事として各地に勤務、司法省行刑局長・名古屋控訴院検事長・大審院次長検事などを経て、昭和十二年（一九三七）林内閣の司法大臣として入閣し、第一次近衛内閣を経て十四年八月平沼内閣の退陣により辞任するまで法相を務めた人物である。<sup>(5)</sup>飯島忠夫の「新建山寺先生碑記」（副碑）によれば、長野城山の石碑が傷んで一部の文字が判読不能になったことを塩野が憂いていたことから、塩野の法相退任後、全国の司法関係の諸員が図って新碑建立に動き、長野県下有志の賛助を得てこれを実現したという。

ここで注意すべきことは、これらの事業に加えて、塩野季彦が『山寺常山伝』の刊行を企図していたという事実である。飯島忠夫はこれについて、「塩野季彦君が祖父の事蹟を明かにしようとする志を起し、自分にその資料を提供して、伝記の撰述を委託した」と述べている。委託の経緯について塩野は、飯島が郷里の出身者で既に『佐久間象山伝』・『長谷川昭道伝』を著していたことによるとし、快諾した飯島は半年もかからずに『山寺常山伝』を書き上げたという。<sup>(6)</sup>ところが、罫紙約一九〇枚の全面に細かな字で書き込まれた『山寺常山伝』は、遂に未刊に終わってしまったのである。昭和一五年一〇月には原稿が完成（序文執筆）していたと見られる『山寺常山伝』の刊行が、『年譜』や『小伝』に比べて遅れた理由は定かでないが、塩野季彦「後記」（昭和三三年九月九日）に「出版については和

本にする考へで：印刷所を物色中、米機の襲来漸く繁く：原本は松代に疎開：」とあるから、昭和二〇年（一九四五）頃にずれ込んだようである。そして、ようやく印刷に着手する段となった同年「五月二十五日夜の大挙襲来に東京の大半は焼かれ、予か住居も罹災し、用紙は灰燼に帰し印刷も中止となった」のである。こうして『山寺常山伝』は未刊に終わり、その原稿および写しのみが山寺家文書・塩野家文書（現在真田宝物館収蔵）に残されることになった。

然るに、この『山寺常山伝』撰述を依頼する際、塩野季彦が飯島忠夫に提供した「資料」こそは、現存する山寺家文書に加えて北澤正誠が閲覧した（後述）とみられる常山の遺稿類をあわせて山寺家文書（山寺常山関係の史料）の総体<sup>(7)</sup>だったと想定されるのである。というのも、『山寺常山伝』には常山の漢詩文や書簡・意見書をはじめ、常山が受け取った詩文や書簡が数多く引用・掲載されているからである。

そこで、『山寺常山伝』に全文もしくは一部分を引用・掲載された史料を一覧にしたのが表1である。表1によると、同書所載の史料の点数は一三三点であるが、これは史料原文の記載点数でありその相当数は全文掲載であるから、『山寺常山伝』が常山とその関連史料についての豊かな情報を含んでいることが理解されよう。次に、引用・掲載史料の内容面に関しては、漢詩文が全体の約半数にあたる五七点と最も多く、常山以外の人物の漢詩文も二〇点あり、常山の遺稿（漢詩文）が記載史料の中心を占めていることがわかる。一方で、常山作成の書簡一点と常山宛書簡一五五点、さらに常山や他の人物の意見書等一〇点近くが記載され、その多くが全文の掲載であることは、『山寺常山伝』の資料的価値を考える上でも重要な事実である。このことは、飯島忠夫が常山の漢詩文以外にも多くの史料を手にとり、その中から重要と見なしたものを引用・掲載したことを示していると考えられるからである。引用・掲載史料以外にも数多くの詩文や書

簡、その他の史料を飯島が手に取ったことは、後述の「常山先生年譜」に記載された詩文の数や現存する山寺家文書に相当数の書簡類その他の史料が残されていることから明らかである。

このように見てくれば、飯島忠夫『山寺常山伝』の成立とそこで用いられた多数の常山関係史料の存在は、「常山山寺先生碑」をこえてより豊かな（多角的な）常山像を描き出すことにつながる史資料だったといえよう。しかし、未刊に終わったとは言え『山寺常山伝』の原稿・副本が残されたにもかかわらず、その後、常山をめぐる研究はほぼ進展しなかった。その最大の理由の一つは、『山寺常山伝』所収史料のほとんどが、現在の山寺家文書に含まれておらず（表1参照）、他の文書群にも見出されていない、ということであろう。特に、『山寺常山伝』や「常山先生年譜」が中心的史料とした常山の遺稿類は、理由は定かでないがほぼ見当たらないのである。こうして、山寺常山に関する研究には、かかる制約に十分に留意すると同時に、明治期以来の伝記的資料の成立（常山像の形成）過程について基礎的な考察を行うておくことが不可欠の課題となるのである。

## 2. 山寺常山像の形成と常山研究の基礎史料

### (1) 常山像の形成

以上をうけて本章ではまず、山寺常山の人物像に長きにわたり影響を及ぼしてきた「常山山寺先生碑」（碑文の内容）がいかにして成立したのか、簡単に検討してみよう。

山寺常山の碑がはじめて長野城山に建てられたのは、常山の没後六年、明治一七年二月のことである。碑文は、『西国立志編』（一八七二）・『自由之理』（J・S・ミル、一八七二）を訳出・刊行した啓蒙思想家・教育者（建碑当時、東京学士院会員、東京大学教授）として知られる中村正直（号敬宇、一八三一～九一）、書は当時書家として名高かった長茂（ひか

表1：飯島忠夫『山寺常山伝』所収史料一覧

no.	史料名	年代	作成	受取	丁数	現存史料	備考
1	詩稿(『病中書懷呈松代侯』)		藤田東湖		7-8		『北信郷土叢書』七巻に全文所収。
2	(書簡)	文政9.1	(常山)	(祖母・母)	9-11		
3	詩稿(『与佐徵明兄聊呈扇』／『佐徵明近得九子墨。一日携来示予。賦而贈。』)	文政9冬	(常山)	(佐久間象山)	12		
4	書簡	5.11	平山銳二郎	山寺源大夫	14		
5	免許状	天保2冬	平山銳二郎		15		
6	仏狼機図説		井上貫流		15		
7	仏狼機図説跋(漢文)	天保9.3	常山源久道題	(長谷川昭道)	16		
8	名和刀記(漢文)	天保2夏			16-17		
9	(書簡)	(天保11カ)10.24	久道	正忠君	17-18		北澤正忠
10	拝岳翁蘭齋北澤君墓下(漢文)	天保4			18-19		
11	天保四年春。奉命將聘豊山先生。赴于江戸…(漢詩)	天保4春			19-20		
12	豊山長野先生墓表	(天保8.24)	林鶴梁(鐵藏)		20		
13	送豊山長野先生還江門序(漢文)				21		
14	書簡		長野豊山	保岡元吉(嶺南)	22-24		
15	興松代侯書		(林鶴梁)		24		
16	不忘軒記	天保4冬	紫溟古賀焜(洞庵)	(山寺源大夫)	25-27	山寺家文書N1	
17	不忘軒記	天保8	林長蘆(鶴梁)	(山寺源大夫)	27		
18	(書状)	天保5.10	佐久間象山	(山寺源大夫)	29		
19	(書簡)		藤田東湖	林鶴梁	29	山寺家文書H	
20	寄藤田東湖(漢詩)	天保10		(藤田東湖)	29		
21	送水戸藤田子虎尾從君公就藩(漢詩)				29-30		
22	(書簡)	(天保13.)4.6	彪(藤田東湖)	不息賢兄(常山)	30-31		
23	寄象山兄(漢詩)	(天保7)	源久道	(佐久間象山)	31		
24	答常山兄之寄、用元韻二首		平啓		31-32		
25	覽山寺常山・佐久間象山二賢契唱和詩有感、卒次其韻欲寄		(鎌原桐山)		32		「鼎鍊異味」と題し、「象山全集」に収録。
26	(書簡)	(嘉永2.)12.4	坦(佐藤一齋)	常山雅契	34		
27	(書簡)	年不詳10.22	山寺源大夫	佐藤老先生(一齋)	34-36		
28	(書簡)	(安政2.)5.9	佐藤捨藏(一齋)	山寺源大夫様	36-37		
29	謙堂日曆(常山記事抜粋)				37-38		
30	(『藟言』の跋、部分)	(文久2)			39		藤森弘庵『藟言』
31	(書簡)	(安政末年)	(佐久間象山)	(横田甚五右衛門)	39		
32	謹而言上	天保9.6		(真田幸貫)	41-47		
33	左伝日作(漢詩)	天保11.4.22			48		
34	使無堂記(漢文)	天保14.5	松代郡宰源朝臣信龍		48-49		
35	(書簡)	(天保15)	(常山)	(渋谷修軒)	50-51		
36	謙虚楼記(漢文)	(明治3)	常山老人		51-52		
37	庸左衛門佐久間君碑銘(漢文)	文久3.3	山寺信龍		55-57		
38	跋兵学盟書(漢文)	嘉永2.1	源龍		58		
39	己酉春仲、龍有故将兵学弟子、属鎌原君…(漢詩)	嘉永2.1			59		
40	(学校建築についての訓示)	(嘉永5.)8.12	河原舎人ほか3名		61		
41	遣悶(漢詩)	(嘉永7)	(藤田東湖)		65		
42	浦賀紀行(漢文)	(嘉永7)			66-68		
43	跋浦賀紀行巻	嘉永7.3.27	(佐久間象山)		68		
44	問対書稿	(嘉永6.7)			69-70		抄録
45	題問対書稿後	(嘉永6.7カ)			70		
46	(書状)	(安政4.)2.7	日下部伊三治	山寺源大夫様	72-76		
47	(書状)	(安政4.)6.19	日下部伊三治	山寺源大夫様	76-79		
48	(書状)	(安政3.)7.1	長岡拜(監物)	山寺君	79-81		
49	(書状)	(安政4.)5	大久保要	山寺源大夫様	81-85		
50	(書状)	(安政4.12.)3	(佐久間象山)		86-88		
51	(漢詩)	(安政5春)			90		
52	癸亥初夏念八日、与塩谷先生約、訪村上氏深川居、…(漢詩)	(文久3.5.28)			92-93		
53	(漢詩)	(文久3)	松影道人		93-94		
54	(書簡)	(文久3.)11.19	謹一郎(古賀茶溪)	源大夫様	94-96		
55	(書簡)	(元治1.)6.26	雪堂老台(渋谷修軒)	無名頓首	98-106		
56	(佐久間象山勅諭草案の批評)				107		
57	(書簡)	(元治1)		(小山田菴岐)	107-108		
58	書回天詩史後(漢文)	(慶応1.5)			109-110		
59	奉命仗劍録(抜粋)		(北澤正誠)		111		

60	送長谷川独柳帰帝京(漢詩)	(慶応3.) 2.13			111		
61	乍忍謹而奉言上候	(明治1) 12.7	松田豊前		112-115		
62	湖山樓詩屏風(抜粋)		(小野湖山)		115		
63	上行政官諸公書	明治2.2.2			116-119		
64	(漢詩)	(明治2.2)			119		
65	与林鶴梁(漢文)	(明治3)			121-122		
66	辞職書	(明治3.) 12.28	山寺常山	岩崎権大参事殿	123-124		『長谷川昭道全集』に収録。
67	(意見書)	(明治3. 12.29)	(久保成)	(篠塚弾正台大巡察)	124-125		
68	高井郡道中(漢詩)	明治3.8.28			126		
69	(漢詩)	(明治3.8)			126-127		
70	浴温温泉(漢詩)	(明治3.8)			127		
71	遊温泉寺(漢詩)	(明治3.8)			127		
72	題愛閑室、贈室主宗公(漢詩)	(明治3.8)			127		
73	金碧楼上作、樓在安代(漢詩)	(明治3.8)			127		
74	沓野山中觀瀑…(漢詩)	(明治3.8)			127		
75	遊萬松山玩秋、賦以贈山主某(漢詩)	(明治3.8)			127		
76	与諸子同遊湯田中争光樓、醉中漫吟(漢詩)	(明治3.8)			127-128		
77	致仕後作(漢詩)	明治3.11			128		
78	(漢詩)	(明治4)			129		
79	失題(漢詩)	(明治4)			129		
80	癸酉二月十七日晚、夢奉謁旧主感応公…(漢詩)	(明治6)			129		
81	謝答北澤議官惠書并濱川海苔(漢詩)	明治6.2.17			129-130		
82	癸酉除夕(漢詩)	(明治6)			130		
83	甲戌新年(漢詩)	(明治7)			130		
84	自題写真(漢詩)	(明治7カ)			130		
85	乙亥十月念七日訪前龍洞練師隱棲…(漢詩)	明治8.10.27			132		
86	原韻(漢詩)	(明治8. 10.27カ)	秋師練		132		
87	(『旧松代藩慣例概略』跋文)	明治9.6	山寺常山		132-134		
88	書春雨草紙後(漢文)	明治9.11	山寺常山源信龍		134-137		
89	菊園先生画像記(漢文)	弘化2.3	山寺常山源信龍		138-139		
90	(書簡草稿)	(明治9.) 6.22	山寺常山拜啓	中村敬宇先生帳下	139-142		「山寺常山中村敬宇往復書簡扣自筆」(長野県立歴史館飯島文庫)
91	泥格頼問答跋(漢文)	(明治8)			142		
92	故二條左府公染翰潜龍城三大字記(漢文)	明治10.10	松代遺老山寺信龍子彰氏		143-144		
93	松代慕古図記(漢文)	明治10.11.20	常山居士山寺信龍子彰甫		144-146		
94	丁丑除日(漢詩)	(明治10.12)			146		
95	戊寅新年(漢詩)	(明治11.1)			146		
96	(書簡抜粋)	明治 .6.16			146-147		
97	(書簡抜粋)	明治7.1.31			147		
98	(書簡抜粋)	年不詳3.7			147-148		
99	(岩村通俊説論の感想)	(明治10)			148		
100	松代封内測量図記(漢文)	(安政2カ)			152-153		山寺家文書M43-4
101	(『龍川先生酌古論』序文抜粋)		(長野豊山)		153		
102	龍川先生酌古論題辭	天保5.9			154		
103	(祭文抜粋)	(天保5.7)	(佐久間象山)		155		
104	亡友今井子洌、病間嘗手写陶淵明集…(漢詩)		(佐久間象山)		156		詩題のみ
105	読酌古論(漢詩)				157		
106	跋異本朱子年譜(漢文)	(天保10)			157		
107	(酌古論自序)		(陳龍川)		158		
108	初心集の儀に付申上	年不詳1.14	源大夫	(鎌原桐山)	159-160		
109	刻指南録序(漢文)	天保9.2	山寺久道		160-161		
110	(書簡)			(小山田采女)	162		
111	常山先生碑	明治17.2	中村正直		163-165		
112	碑陰記	明治17	長岡護美		165-166		
113	新建山寺先生碑記	昭和15.10	飯島忠夫		166-167		

※真田宝物館所蔵山寺家文書所蔵の原稿による。

※斜字体は常山以外の人物の著作を示す。

る(三洲)である。肥後(熊本)藩主細川斉護の第六子で当時元老院議官だった長岡護美(一八四二―一九〇六)が「碑陰記」を撰し、篆額はもと宇和島藩主で当時修史館副総裁を務めた伊達宗城(一八一八―九二二)である<sup>(8)</sup>。

建碑の経緯について中村正直の碑文は、「先生の故旧門人、碑を長野城山に樹て、予に属して銘を為らしむ」(参考資料2)とし、長岡護美「碑陰記」は、「旧藩士民、碑を建て、以て其徳を表はし不朽に伝へむと欲し、先生の内姪北澤子進を介して、余に碑陰に記せむことを請ふ」と記す。常山の「故旧門人」を中心とする「旧藩士民」が、常山の徳を称えることを目的に建碑を企図したとひとまず理解できよう。

では、この建碑は、具体的に誰が中心となり、どのような意図で、いつ計画されたのだろうか。この点について、本稿では立ち入った考察をする準備がないが、現時点で碑文以外から分かっていることについて、限られた資料からではあるが、いくつか触れておきたい。

まず、真田宝物館蔵山寺家文書には、中村正直碑文と同内容の文章を収めた書付が残されている<sup>(9)</sup>。その末尾は「明治十六年十一月 従五位中村正直撰」、題は「常山先生山寺君之碑」となっている。このことから、中村正直の碑文は、明治一六年一月にはほぼ確定した後、碑文題を「常山山寺先生」に変更し、冒頭に撰・書・篆額者、末尾に建碑年月(「明治十七年二月建」)が加えられて建碑に至ったことが分かる。中村正直の撰文に關しては、早川春信『山寺常山小伝』(早川春信発行、一九四〇年)が「中村敬宇先生が常山の碑文を作る際、初め紀功碑と題して事蹟を記してあるから之を収録して置く」として、「常山山寺先生紀功碑」の全文を紹介している。これによって、明治一六年一月以前に、中村正直が碑文の原案を作成していたことが知られる。

では、明治一六年一月以前から建碑に關する実務を担ったのはど

のような人物だったのだろうか。この点に關して注目されるのは、長岡護美「碑陰記」に「先生の内姪北澤子進を介して、余に碑陰に記せむことを請ふ」と記されていたことである。この北澤子進とは、松代藩士北澤正忠(三百石)長子で、幕末明治期の官吏・経世家、歴史・地理学者として知られる北澤正誠(一八四〇―一九〇一)である。佐久間象山の門人で、明治期には松代藩権少参事から政府左院中議正となり、のち外務省勤務や東京地学協会で活動した北澤の経歴・事跡については、原田和彦氏らの研究に詳しいからそちらに譲り<sup>(10)</sup>、以下では本稿にとって重要な点をいくつか指摘しておきたい。

北澤正誠に關してまず注目されるのは、北澤家と山寺家との關係である<sup>(11)</sup>。すなわち、正誠の祖父・北澤源次兵衛正暉(蘭壑)は常山祖母の弟にあたり、その蘭壑の二女・鎮子が山寺家に嫁して常山夫人となったのである(天保三年五月)。正誠は常山の義姪(義理の甥)にあたるのである。さらに、こうした關係を背景に、常山が蘭壑・正忠・正誠と密接な關係を取り結んでいったことも注目される。例えば天保四年三月、藩主幸貫の意をうけて儒学者長野豊山招聘を目的として江戸に出た際、常山は、同二年九月に没した北澤蘭壑を哭す詩(「拜岳翁蘭壑北澤君墓下」)を作っている。常山はそこに「議創国学、或謀建社會」と記しているが、松代藩の学問振興・藩校(「国学」)創設が両者の共通の意向だったことが理解されよう。天保一一年頃の北澤正忠宛久道(常山)書簡では、刀劍について「矢澤大夫の惑をも解き…」などと率直なやりとりもなされている。さらに、「正誠は先生より少きこと三十二歳、幼よりして先生に親炙す」と言われるように、正誠自身、幼時から常山に親しく薫陶を受けていたことが知られるのである。

次に注目されるのは、明治一四年一〇月に正誠が「常山先生年譜」を撰していることである。原本の所在は不明だが、この年譜は昭和一五年(一

九四〇) 一月に、天籟社編纂『山寺常山先生年譜』として飯島忠夫の「題言」を付し信州書屋から刊行された。この年譜については原田和彦氏も着目し、象山像確立との関連性に注意を促しているが、興味深いのは、「象山先生年譜」(明治二年)が象山の残した様々な文書の整理に基づいて作成されたという指摘である<sup>(13)</sup>。というのも、北澤は「象山先生年譜」作成時と同様に、常山の遺稿や書簡等を精査して「常山先生年譜」を撰述したと考えられるからである(常山の事跡を漢文で簡潔に記した「常山先生年譜」には常山が作った漢詩文の題が年次ごとに列挙されている)。

北澤正誠が「常山先生年譜」を撰じた意図について、これを明記した記録は今のところ見当たらないが、約二年後の「常山山寺先生碑」の建碑に向けた動きの前提となったことは明らかである。それは、長岡護美への「碑陰記」執筆依頼をはじめとして、東京にいた北澤が碑文の文章等を集めることに奔走したとされることにも示されている<sup>(14)</sup>。さらに見落とせないのは、碑文の撰・書・篆額者の人選が主として北澤の人脈によるものではないかと想定される点である。まず、中村正直は、文久三年、北澤が藩主幸教に随従して江戸に出府した際、安井息軒や塩谷宕陰らとともに親しく交わり、以来密接な関係にあったことが知られる<sup>(15)</sup>。また、明治一二年二月、東京地学協会設立にあたって北澤は、伊達宗城らとともに上野精養軒に参集し、長岡護美とともに規則立案委員となり、同年九月にはスウェーデンの地理学者ノルデンシヨルドらが来航した際の歓迎式典に長岡護美・伊達宗城とともに出席し、最後に挨拶を述べている<sup>(17)</sup>。このように見てくれば、碑文撰・書・篆額者の人選は、北澤の人脈によるところが大きいと見ることができよう。こうして、山寺常山像(「常山山寺先生碑」が描き出した常山の人物像)は、明治期にあつては(佐久間象山像の成立過程と同様に)北澤正誠がその形成に大きな役割を果たしたとみることができるとは<sup>(18)</sup>である。

## (2) 「常山先生年譜」の根拠史料

では、こうして成立した山寺常山像が、現在にまで大きな影響を及ぼし続けているのはなぜなのだろうか。それは、先述のような史料的制約の一方で、「常山山寺先生碑」以来の常山像が、北澤正誠による山寺家文書の精査とそれに基づく「常山先生年譜」をその基礎としていること―一定の史料的基礎を持つていること―に求められるように思われる。ただし、北澤の「常山先生年譜」は、その記述の根拠を明記して常山の事跡を述べているわけではない。また、飯島忠夫は、「常山先生年譜」の記述が「正確」であるとする一方で、記述の正確さの根拠を、(史料的根拠よりは)北澤が幼時から常山に感化を受けていた点に求めている(「幼よりして先生に親炙す。其の録する所、概ね正確を失はざるを知るべし」、前掲「題言」)。

それでは実際、「常山先生年譜」はどのような史料に基づいて著されたのだろうか。この点に関して以下では「常山先生年譜」本文の記述内容について簡単に検討してみよう。次に掲げるのは、「常山先生年譜」天保元年の項の全文である。

天保元年庚寅、先生二十三歳。○元旦志を述べ、詩ありて曰く、  
鳳曆庚寅歲。添<sub>レ</sub>齡正廿三。吾固未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>信。任重力難<sub>レ</sub>堪。遠鑑<sub>三</sub>治  
乱蹟。遙懷<sub>三</sub>菅与<sub>レ</sub>楠。思<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>己德。恐遺<sub>三</sub>千年慙。遍察<sub>三</sub>宇中  
物。微虫尚有<sub>レ</sub>蚕。我作<sub>三</sub>靈動長。何為事<sub>三</sub>空談。苦節元無<sub>レ</sub>厭。安  
眠豈敢甘。龍門跳<sub>レ</sub>浪上。虎穴拚<sub>レ</sub>身探。所<sub>レ</sub>志忠兼<sub>レ</sub>孝。詩書日夜  
耽。人而由<sub>三</sub>斯道。誰謂<sub>レ</sub>非<sub>三</sub>眞男<sub>一</sub>。

○二月、古賀侗庵の門に入る。○是の歳、先生江戸より帰り、四月、与<sub>三</sub>同盟書を作りて志を述べ。○秋七月既望、佐久間象山、寺内松濤と同じく月を恩田大夫の樓に賞す。先生古風<sub>二</sub>一篇ありて、象山次韻す。○九月、桐山鎌原先生に陪して、日央上人を城北の自然窩に訪

ふ。先生短歌一篇あり。○九月、学校普請掛助となる。○十月の望に、後赤壁の遊をなす。先生詩あり。○十二月、呈鎌原先生書、復三蘭齋先生書、与三佐久間子明書、慰三菅沼巽夫書、並に形名学序を作る。

一見して明らかなきことは、十二月の漢詩文題の列举に見られるように、天保元年の記事のほとんどが常山の残した漢詩文に依拠しているというところである。佐久間象山・寺内松濤・恩田氏との観月会の開催（七月）という子細に及ぶ叙述の根拠は、常山の詩文に基づくものであろう。元旦に志を述べた詩のように、全文を掲げてあるものもある。ただし、右には、二月の古賀侗庵入門記事、九月の学校普請掛助拜命記事のように、常山の漢詩文以外の情報に基づいて記された可能性のある記事もある。

そこで、「常山先生年譜」から読み取りうる限りで、北澤正誠が参照したと考えられる常山関係史料を列挙したのが表2である。それによると「常山先生年譜」は、全体として二二〇点以上の史料を踏まえて著されているとみることができ。北澤が常山の残した多数の史料によって「常山先生年譜」を著したことは間違いないといえよう。注目されるのは、史料表題等から窺えるように、表2に見える史料のほとんどが常山の遺稿<sup>11</sup>漢詩や序跋などの漢文だと考えられることである。これは、先掲の天保元年の項の記述ともよく一致している。もちろん、表2の中には、「予備の法」の「経画書」（文政一〇年）や「短歌」（天保元年）、高田利友との「文書」の往復（安政三年）など、献策書や和歌、書簡等を指すとみられる記載が含まれていることも見落とせない点である。北澤正誠は、例えば「常山文集」<sup>12</sup>のような漢詩文集のみに依拠したわけではなく、山寺家に所在した漢詩文以外の諸史料も踏まえて年譜を撰したのである。

以上を踏まえて言えば、北澤は、書簡等の常山関係史料も参照しつつ、自身の価値判断で常山の遺稿（漢詩文）をその中心的な根拠史料に定め、

年譜を撰したのだといえよう。その意味で、飯島忠夫が「此の年譜たるや、専ら文芸を主とし、先生の全貌を窺ふに、偏する所あるを免れず」と述べているのは、一面での確かな評価であるともいえよう。以上、「常山先生年譜」の記事は、常山の漢詩文を中心に、北澤正誠が閲覧し得た常山関係史料を基本として成立したものである。

以上、常山像が関係史料に依拠して明治期に形づくられる過程で、北澤正誠が果たした役割は極めて重要なものであると考えられる。したがって、常山の顕彰に動いた北澤らの意図に踏み込んだ考察が必要となるが、十分な準備がないため、この点については今後の課題とせざるを得ない。ただ、本稿で一つ留意したのは、常山関係史料を利用した北澤によって初めて明確な常山像が創出されたというわけでは必ずしもない、と考えられる点である。特に、幕末期にかけて常山が関係を取り結んだ人物から受けた評価は、常山像の形成を考える上で極めて重要な意味を持っていると想定される。そこで以下では、この点について検討してみたい。

### 3. 幕末期にかけての山寺常山像の形成

#### (1) 山寺常山の学問と民政

「はじめに」で触れたように、現在までに描かれてきた常山像においては、「松代三山」の呼称や江戸での学問的交友関係の記述に見られるように、常山と学問の関係が強調されていた<sup>(1)(4)</sup>。それはまた、こうした学問的造詣の深さが名奉行ともいべき常山の事跡<sup>(6)(8)</sup>につながったことを暗示したものであると見ることもできる。

では、このような常山像は、「常山山寺先生碑」（あるいは「常山先生年譜」）において初めて形づくられたもののだろうか。この点について興味深い記述を行っているのが、明治元年一二月に更級郡若宮八幡の神職松田式部の父豊前が朝廷要路の人物に提出しその登用を説いたとされる言上

表2：「常山先生年譜」記載史料一覧

年	題
文政10	(書、先生憂念して書を作りて桐山先生に呈し、予備の法を經画す。)
天保1	(詩、元旦に志を述べて)〈全文〉【詩稿】／「与同盟書」(古風二篇、佐久間象山・寺内松濤と同じく月を恩田大夫の樓に賞す)／(短歌一篇、桐山鎌原先生に陪して、日央上人を城北の自然庵に訪ふ。)(詩、後赤壁の遊をなす)／「呈鎌原先生書」／「復蘭菴先生書」／「与佐久間子明書」／「慰蒼沼巽夫書」／「形名字序」
天保2	「祭先考文」／「祭高祖考文」／「論剝碑事」／「奉桐山先生書」／「呈平山先生書」／「与鎌原日唯書」／「与菅原巽夫書」／「与小林至静書」／「賀恩田執政大孺人八十初度并序」／「論厄年」／「論淫祠」／「名和刀記」／「読酒侯愛梅説」／「与若下翁書」／「与佐久間象山書」／「読春秋占筮書補正序」
天保3	(五言古風、先生疾ありて、田澤温泉に遊び、別所に抵り、拙庵禪師を訪ひ、席上分韻して)／「題読史臆斷詩」
天保4	(述懐七首、江戸祇役の途次)【詩稿】／「帶琴堂記」(詩、「携將詩伴対嵯峨。一帶清川夜奈何。指點雲間月出沒。蟾光孰与月光多」)(長野豊山)〈全文カ〉／(書、豊山、孟子浩然の堂に講じて、吾我の辨あり。佐久間象山竊に之を聞き、其の説を非難し)(佐久間象山)／「送豊山先生序」／(書、櫻宇林祭酒の不忘軒三大字の書承諾の謝)【詩稿】／「与澁谷侯侯書」／「与林長孺書」／「奉松崎懽堂書」／「祭矢澤千十郎文」／「雜説」／「教子説」／「春秋占筮書補正」(佐久間象山)／(長句、佐久間象山を送る)【詩稿】
天保5	「与鎌原高岡書」／「祭伯父梁門君文」／「復日央上人書」／「田中丘隅紀事」／「奉伺庵先生書」／「嘉東二話序」／(文、宮尾南嘯卒す。之を祭る。)(書、伺庵先生、書を先生に与へて、時弊を論じ、先生を待つこと甚だ厚し。先生感激して之に答ふ。)(書、林長孺、書を与へて時事を論じ、先生を待つに英雄豪傑を以てし、先生に期するに正学を振起するを以てす。先生之に答ふ。)
天保6	「言志古風十首」(「天下豪傑士…」)【詩稿】／「復竹村族孝書」／「先君遺墨跋」／「寶珠塔銘并序」／「遠藤正毅墓誌銘」／「復金兒雪庵書」／(書、佐久間象山に与へて学を論ず)／「復林鶴梁書」／「読韓魏公伝」／「宮尾温卿遺愛碑銘」／「岡島平治墓表」
天保7	「呈平山先生書」／(心叢引)／(鼎陳異味、柳泉恩田大夫の館に合し、十韻を賦し、冊を為す。)(紀事詩十首、長国寺土木の役につき)【詩稿】／「千藍書卷跋」(詩、城東の清瀧山に登り)【詩稿】／「重陽登高記」(佐久間象山)／「不忘軒記」(林鶴梁)【伝】
天保8	「侍世子燕居応制作」【詩稿】／「運籌堂歲暮」(備前芳列公の書の跋)(古賀伺庵)
天保9	(奉送八韻詩、世子に陪して唐津の鏡山公を宴す、公国に就く)【詩稿】／(文信公の指南録の序)【伝】／(書後、佐久間象山の北越の紀行のもの)／「神駿行(伊澤作州政義に贈る)【詩稿】
天保10	「梅雪歌」【詩稿】／(東遊紀行十九首)(佐久間象山)／「古鏃歌」【詩稿】／「与佐久間象山書」／「異本朱子年譜跋」【伝】／「貞觀政要跋」(詩、藤田東湖・戸田蓬軒等、公を輔けて先づ経界を正さんとす。物論鬱然たり。先生之を不可として)
天保11	(詩、藤田東湖、扈從して藩に就く。先生之を送る。)(全文)【詩稿】／(故宅紀事十首、家を信州に移す)【詩稿】／「与越後関根生書」／(大林寺所蔵の崔鉉架鷹詩跋)／「雜言三十余則」
天保12	「送成澤某序」(詩、幕府特に命じ、公を挙げて閣老と為し、兼ねて海防掛を董せしむ。先生遙に之を聞き、欣然として詩を作りて)〈部分〉【詩稿】
天保13	(詩、小野湖山、先生を訪ひて、当世の務を談ず。立田静山、弥天上人等来会す。)(与同盟書)
天保14	(長古賦、佐久間象山、親の疾を帰省し、先生に贈る。)(佐久間象山)／(次韻、上の佐久間象山に対して)／(詩、公会計総裁となり天下の財政を統へ尋ぎて疾を以て職を辞す。先生感慨す)〈全文〉
弘化1	「親書唐太宗詩句記」／「胡蝶夜遊卷書後」／「菊園先生画像記」／「松蔭恩田君行状」／「倉士寧静字説」／「争座位帖跋」
弘化2	「歳暮郡序紀事」【詩稿】／「王母墓陰記」
弘化4	(詩、川中島も地大に震ふに会す。～封内艾安にして、生理復旧するは蓋し先生の力、多きに居る。)(小野湖山)
嘉永1	(詩、暴風迅雨ありて、庭前の樹を折る。蓋し百年外の物なり。先生詩ありて之を記して)〈全文〉【詩稿】／「題松木君詠草巻軸後」
嘉永2	(句、門人鎌原貫唯の始めて開講するや、先生は桐山翁及び長谷川昭道、高野武貞とその席に赴けり。)(部分)【詩稿】／(詩、震災後の状況を見る。～先生時に郡宰を以て従ひて顧問に備はる)〈全文〉【詩稿】／(送序、佐久間啓、江都に往く。)(跋兵学盟書)【伝】
嘉永3	「高田嘉兵衛手書跋」／「八幡宮帷幕背記」／「龍潭硯匣題」／「毛利元政墓表」／「義婢冬墓誌」
嘉永5	(長歌、封内水内郡地京原の女児狼を殺すの事を聞き)／「題松木櫻山詠草」
嘉永6	(詩、佐久間象山江邸に在りて軍務を經紀し、詩を賦して)(佐久間象山)〈全文〉／(詩、上の佐久間象山の詩に和して)〈全文〉【詩稿】／(八韻の詩、月に対して懐を詠じ、佐久間象山に寄す)／(詩、上の常山の次韻)(佐久間象山)／(詩、月に対して再び前韻を用いて子明に寄す)／(五百言の詩、桐山先生一周忌に逢ひ)
安政1	(記、松代花丸成る。堀田正徳董す。之が記を作る。)(消夏漫筆序)／(国歌一首、肥後の宗室長岡監物、水戸の藤田東湖と往来して、竊に画策する所あり、烈公為に国歌一首を書す)【烈公】／(詩、常山先生の従兄弟綿貫東陽、東湖に因りて策を烈公に献ぜしが、此に至りて、東湖一詩を裁し)(藤田東湖)〈全文〉／(詩、三村晴山、將に郷に帰らんとし、別宴を濱園に開く)【詩稿】
安政2	「題花月友卷末」／「松代封内測量図の序」(詩、公、參府し、竹村可医之に扈從す。先生、詩ありて行を送る)【詩稿】／(十四韻の詩、若州の僧伝苗を長国寺に見て)【詩稿】／「岡島莊藏碑陰記」(詩、先公が栽えし所の象山の櫻樹、霜葉紅に染めて宛も春花の如きを望み、因りて小杜霜葉の句を以て韻を分かちて)【詩稿】／(長句、江戸の地大に震ふ。先生、磯田音門と遽に江戸に赴き、公及び大夫人に謁して起居を問ふ)【詩稿】／(書、再び時事を論じ、俄英來寇長崎警衛の事に及び)(長岡是容)／(一書、見聞私記一書を贈り)(長岡是容)／(和歌、「別れては逢見し事も武蔵野の、草の仮寐の夢かと思ふ。)(長岡是容)〈全文〉／「題見聞私記後」／「續續考証卷書後二篇」
安政3	(文書、肥後の高田利友と屢々文書を往復す。)
安政4	「新年」【詩稿】／「題川中島古戰場地理記」／「指掌図後文」(詩、佐久間象山幽屏に在り、懐を写して先生に寄せて曰く)(佐久間象山)〈全文〉／(書、先生に贈りて、国事を論ず)(薩藩日下部伊三治)／(文、武靖公二百年忌の祭に逢ひ、岩下清農等射を神前に試みて、匾額を献じ、先生に請ひて之が文を作る。)(好白公書牘書後)／「言志吟十首書後」／「大岡夫人墓陰記」
安政5	(一詩、時に亜使跋扈し廟堂因循す、先生憤慨して)〈全文〉【詩稿】／(詩、僧伝苗、將に兵庫の般若林に董席たらんとし来りて別を告ぐ)【詩稿】／「金兒雪庵墓表」
安政6	(詩、一斎佐藤先生の八十八壽に逢ひ)【詩稿】／(文、川中島甲越戦争三百年の忌辰に逢ひ、先生文を作りて、典厩信繁公を祭る。)
万延1	(詩、退朝して長国禪寺に抵り、感應公の廟を拝し)〈全文〉【詩稿】／(詩、久保土龍を訪ふ)【詩稿】
文久1	「助役歿」(和官関東降隊、信州の諸藩、兵を出して警衛す、先生感嘆して)／(長歌、嵩春斎忌諱に觸れ、獄に下りて死す。先生之を哭して長歌あり。)
文久2	「新年作」【詩稿】／(長歌、同僚磯田音門に五鬢松を恵まれ)【詩稿】／(跋文、天朝の小吏小田又蔵と幕府の川路左衛門尉と問答を記せる冊子のもの)／(碑陰の記、恩田貫実歿す。男貫慎に代わりて碑陰の記を草す。)(藤森天山薊言の跋)【伝】／「人日謝答諸子見和」【詩稿】／「題致仕大夫愛水恩田翁燕居肖像」【詩稿】／「水亭觀堂」【詩稿】
文久3	(佐久間國達碑文)
慶応1	(詩、古賀茶溪の書を得。中に近製三首あり。先生和韻して之に答ふ。「世上猜疑眞畏塗。屏居以後一詩無。」の句あり。)(三河語跋)／「回天詩史書後」〈全文〉／「茶溪翁詩書後」／「片井翁画像記」／「雜詩」

慶應2	(新年作二首)／「温泉雑詠四十余首」(高井郡山田温泉に赴く)【『詩稿』】／(天佑行、高井鴻山來訪せんとして、黄昏に棧道を過ぎ、誤りて深谷の殆ど二百尺なるに陥りしが、大樹之を支へて、纔に死を免れたり)
慶應3	(詩、千巖禪師、松代の大林寺より武州世田谷の豪徳寺に転住す)【『詩稿』】／(詩、城西の龍洞院に遊び、水月一觀楼に登りて月を賞す)【『詩稿』】／(詩、高井郡巖松寺の福島正則の墓を過りて感慨に堪へず、詩を賦して之を弔し)【『詩稿』】
明治1	(詩、長谷川昭道、京師より歸りて先生を訪ふ。〈全文〉)【『詩稿』】／(陰雨行一篇)(小林至靜、江戸より還る)【『詩稿』】／(師友手簡跋)
明治2	(哭詩五章、小林徳方卒す)【『詩稿』】／(詩、大林の梅仙禪師、上野前橋の海龍院に董席す)【『詩稿』】／(詩、権弁事小野湖山、先生を朝に薦む。朝議之を徵す。命下るの日、藩吏之を阻みて、壅閉して通せず。既にして道路紛々たり。事先生の耳に入る。先生慨然として)〈全文〉)【『詩稿』】／(詩、上の詩に更に一詩賦して曰く)〈全文〉)【『詩稿』】
明治3	「俊鷹説書後」／「塩野入生命名説」／「白井子康摹本書後」／(詩、下野の足利藩士木村清明、先生を訪ふ、詩を賦して其の大参事川上才佐に寄せて)【『詩稿』】／「中島宇吉碑陰記」／「謙虚樓記」／「争光樓額字書後」／「可亭額字書後」／「晴嵐隱樓額字書後」／「对金樓額字書後」／「正法眼蔵印記」／「水野子謙字説」／(詩、感遇の諸作)【『詩稿』】
明治4	(詩、上田藩権大参事山口毅、詩を先生に寄す。)(山口毅)／(詩、上の和韻)【『詩稿』】／「東湖手東書後」／「与古賀茶溪、林鶴梁、安井息軒、田口江村、中村敬字書」／「書画帖序」／(長歌一篇、笠島村に達して狂瀾を觀て)【『詩稿』】／(書、静岡より書を先生に寄せて南遊を促す)【古賀茶溪】／(復書、偶々、廢藩置県の際に逢ひ、延期を告ぐ)／(小律五首、先生上田に遊ぶ、公弟康斎、穀堂の諸公子、及び前大参事山口毅以下の諸子侍坐し懇待)【『詩稿』】
明治5	「長野雜詩十二首」(長野に卜居し徒を聚めて道を講ず)【『詩稿』】／(詩、先生金陵と相別れて十年、懐旧の情に堪へず、其の韻を用ひて、賦して莠圃に示して、兼ねて金陵に寄す。)(詩、鯖江の人口焯脚、其の兄某に從ひて長野に來り)【『詩稿』】
明治6	(一詩、新年に学制改正の令を聞きて、心に感ずることあり。)(全文)／(詩、長野県権参事汾陽某職を辞して鹿児島に歸る)【『詩稿』】／(二詩、夢に感應公に謁し、覺めて感ずることあり)【『詩稿』】
明治7	「新年」【『詩稿』】／「製絲指南跋」／(詩、松代長国禪寺の住職畔上梅仙、將に相模小田原の最乗禪寺に転住せんとし)〈部分〉【『詩稿』】
明治8	「送宮本猶興遊学東京序」／「東遊紀行」／(詩、梅仙禪師を訪ひて)
明治9	「泥古頼問答書後」／「松代藩慣例概略跋」／「鈴木重亮自謄鈴林扈言書後」／「西種雜纂引」／「春雨草紙書後」【『伝』】／「伊藤莚止墓銘」
明治10	「復吾妻兵治書」／「柳堂恩田大夫像贊」／「松代墓古図記」／「旧君十一公親筆記」
明治11	(詩、元旦に詩を賦して曰く)〈全文〉)【『詩稿』】／「飢肥侯祭感應公文跋」
著作	『懼堂雜纂』十卷／『如坐漏般居紀聞』十二卷／『詩文集』十三卷(詩八文五)／『松代封内実測図』

※史料全文もしくは一部が掲載されているものは〈全文〉〈部分〉、常山以外が著した史料については〔著者名〕、『山寺常山伝』掲載のものは【『伝』】、『常山先生詩稿』掲載のものは【『詩稿』】のように、それぞれの表題の後に記した。

書である(表1-61)。

乍恐謹而奉言上候

先達愚息式部上京之節、為奉言上候二付、蒙御沙汰候、松代藩  
 臣山寺正左衛門名原源大夫、近年老寡君之時務策文章奉供高覽候様、所望仕  
 候処、……一体同人儀ハ亡佐久間修理ト同学竹馬ノ朋友ニ候ヒシガ、  
 其性質ヲ、孔門ノ四科ニ比喩イタシ候ハ、修理ハ文学ノ科ニ当リ、  
 正左衛門ハ政事ノ科ニ当リ可申人物ニテ、其趣向大ニ相違イタシ  
 候。右故、文章之達意ヲ專トイタシ、彼ノ修理方櫻賦ノ如キ、花ヤカ  
 ナル伎倆ハ無之候。同人実効ノ一端ヲ可レ見モノハ、自撰ノ使無堂記  
 及旧幕ノ儒員亡古賀小太郎ノ撰スル不忘軒記ニテ、大凡思過半可レ  
 申ニ付、右二篇ヲ写シ、乍恐奉供高覽候。……民政ノ事モ、学力  
 モ有之、多年其事ニ鍊磨イタシ候老成ノ者へ、御下問有之候ハ、  
 民間ノ利病モ、一々分明ニ被レ為ニ聞召分候様、可レ奉言上候。正  
 左衛門儀ハ先有名之信濃守時代ヨリ卅餘年歴勤イタシ、政蹟モ有之  
 候処、近年権要ノ為ニ被レ忌、空敷沈淪罷在候。……信州辺ニテハ、  
 是迄モ名ノ聞エ候人物ニ付、被レ為レ召候ハ、随分 御為ニ可ニ相成  
 ト窃ニ奉存、文章ニ篇相添、乍恐此段謹而奉言上候……

右の史料からは次の点を読み取ることができよう。まず、象山は「文  
 学」、常山は「政事」にすぐれているというように、常山は佐久間象山と  
 同列に比較される対象と見なされていたことである(破線部)。「松代三  
 山」といった認識につながる常山・象山の併称がこの時期には確立してい  
 ることが知られる<sup>20)</sup>。次に、常山の「学力」が「民政」の重要な背景  
 をなしているとの認識が注目されるが(波線部)、関連して常山に関する  
 「文章一篇」(「使無堂記」・「不忘軒記」)への言及はさらに注目される。常  
 山の学問的取り組み・学識を反映して成立した文章が、「学力」に基づい  
 た「政事」の力量(「実効」)<sup>21)</sup>を証するものと見なされているのである。

この「文章二篇」のうち、「使無堂記」（天保一三年）は、常山が郡奉行に任じられた際、訴訟を裁く自邸を「使無堂」と称して自ら撰じたものである（表1—34）。「使無堂記」で常山は、訴訟が起きることの無い状態（「使無訟」）に民を導くことを理想とし、そのための基本として「伍法」「民産」「教化」「風俗」「志書」を挙げている。ここに見える「風俗」や「教化」という政治理念は、一八世紀末に政治論・経世論の焦点とされ、昌平黷の学者らによっても強調されて、幕府寛政改革ではその基本理念とされるに至ったものである。<sup>(23)</sup>一方、「不忘軒記」は、祖父母・父母の念願だった「賓館」の再建を常山が果たした際、「祖父母・父母の恩」を子孫にまで伝えようとその堂を「不忘」と呼び、その由来の記を昌平黷の儒官だった古賀侗庵に請うて成ったものである。<sup>(24)</sup>先祖への「孝」を重視するその内容は、寛政異学の禁における「孝」を第一とする教化政策の展開、鎌原桐山が「孝」を強調して歴史編纂事業や士民の教化（「風俗教化」）に取り組んでいたことと軌を一にしたものと言える。このことは、常山が松代藩内での学問的交友関係を基盤として、寛政異学の禁以来の昌平黷を中心とするネットワークの中で、主要な学者らの学問や政治論・経世論を摂取しつつ、彼らに学問的力量を認められていったことを示している。<sup>(25)</sup>常山が幕末期に、いずれも幕府儒官の安井息軒・塩谷宕陰・芳野金陵・古賀茶溪・田口江村・中村敬宇（碑文撰者）らと深く交わったのは、<sup>(27)</sup>天保初年以來のこうした関係が背景となっていたと考えられるのである。

ここで想起されることは、鎌原桐山が常山から『白川流話 谷の鶯』（松平定信の事跡を描いた明君録）の写本（常山父久敬の筆写本）を貸与された際、藩主真田幸貫の実父松平定信の政治（幕府寛政改革）を「寛政維新」と呼んで高く称揚していたことである。<sup>(26)</sup>「寛政維新」の核心を「節儉ノ典、賑貸ノ恵、□設ノ宜、風化ノ速」（儉約や振恤、風俗教化）と見なした桐山らは、自身推進した「風俗教化」政策を一面で「寛政維新」を

継承するものと考えていた、とみることができよう。常山（・桐山）は、寛政異学の禁に連なる昌平黷の学者と密接な関係を取り結んだというばかりでなく、儉約や振恤、風俗教化を内容とする政治・政策面でも、幕府寛政改革の影響下に学問・政治に取り組んでいたと考えられるのである。こうした関係を象徴するともいべき「文章二篇」が明治初年まで高く評価されていたことは、当該期における常山への評価（常山像）が「寛政維新」以来の民政の基本方向（特に「風俗教化」）に沿うものとして形づくられていったことを示唆しているように思われるのである。

## （2）「賢君」幸貫と山寺常山

こう見てくると浮かび上がるのが、松平定信を実父とする真田幸貫の存在である。というのも、幸貫は定信を模範として武芸奨励や武備の充実策を打ち出し、これをうけた鎌原桐山らも土風の振起や軍事の方針獲得といった問題意識から真田家の系譜・事蹟編纂等に取り組んでいたからである。そこで次に、幸貫を紹介するにあたってよく引かれる藤田東湖の「病中書懐呈松代侯執事 有序」（弘化二年）を掲げておきたい。<sup>(28)</sup>

数年前、彪嘗過平山銳二、談偶及当世諸侯、銳二曰、承平日久、士氣卑弱、況若富貴之人、所謂生於深宮之中、長於婦人之手者、往々皆是、以僕所聞。独松代侯好文尚武、愛賢下士、一世之賢君也。後二三年、訪川路弥吉、川路謂彪曰、聞子之、君勵精圖治、国事一新、不知所交如何人。彪未对、川路曰、蓋与松代城主交、以某所視、三百諸侯、未有松代之賢過者、以子之君之明、交於松代之賢、其切磋之益、想不亦多乎。彪於是始銳二之説為不妄、∴。

右呈松代侯詩、天保丙申之冬<sup>(29)</sup>所作、余力疾把筆呈之於侯、侯使其侍医<sup>(30)</sup>涉谷秀軒来問疾∴因憶当时風俗衰敝、識者慨之、松代侯之抵磔川邸也、我老公特命彪及川瀬教徳侍宴、∴侯出当宰輔之任、有志之

士、亦往々拔擢、姑以彪所交數之、岡本江州・矢部駿河・川路左衛門・羽倉外記・江川太郎左・林鉄蔵・平山銳二之倫、或以材能任要路、或以武技蒙寵榮、佞臣屏跡、俗吏破膽、翕然有中興之勢。老公方在藩、聞之大喜、益竭心於国政、其於天下大事。：

天保初年頃、幕臣・兵学者で常山が入門した平山兵原の子・平山銳次郎は東湖に対して、当時の諸大名のなかで真田幸貫のみは文武を好尚し、賢士を愛する「一世之賢君」だとの評判を語り、その後、川路弥吉（聖謨）も、三百諸侯で幸貫が最も賢明だとし、東湖が仕えた徳川斉昭の「明」と

幸貫の「賢」が交わって切磋すれば、その益は大きいだろうと述べたという。<sup>30</sup>また、幸貫が幕府老中に就任した際、彼らを登用して「中興之勢」を出現させたともいう（破線部）。以上に関して山寺家文書には、「当鍋島侯の御詩作：羨敷事二御座候。：桐山先生（松平定信）へ為御見可申上奉存候」と書き込まれた「佐賀侯・水戸相公席上作」の詩が残されている。また、佐久間象山は弘化二年六月六日付の家老恩田頼母宛の書簡で、「何卒西国にては鍋島侯、東国にては松代様と申様に天下の士の心を帰し候程に、御家政をも美しく仕度候」と述べている。<sup>31</sup>常山も平山銳次郎・藤田東湖らと相重なる意識の下に行動していたことが窺われる。

ここで注目されるのは、こうした幸貫を取り巻く天保期の「明君」「賢君」グループに対して表明された期待が、「はじめに」で触れた常山像（特に④⑤⑦）と密接に関わっているとみられる点である。常山が兵学者や水戸藩の学者らと取り結んだ人的関係とそこで共有された問題意識こそは、兵学を平山兵原に学び④、幸貫の海防担当をうけて兵学を講義⑤、黒船来航時には長岡監物・藤田東湖らと画策する⑦といった常山像描出の原型となつたと考えられるのである。もちろん、幸貫の明君評判に関して常山は、水戸学・兵学者らにとどまらない人物とやりとりを行っている。詩文家あるいは幕府代官としても知られる林鶴梁の「与松

代侯書」〔長孺嘗側聞。閣下以不世出之才、博究天下之書、不挾諸侯之尊。以接天下之才。蓋一代賢諸侯也。然未得聞其詳。其後長孺与閣下之臣渋谷碧・山寺久道等相識。因得悉之〕表1-15〕はその一例を示している。こうした人物も含めて当時関心を集めた定信・幸貫らをはじめとする「明君」「賢君」をめぐる交友関係が、後の常山像形成の背景となつたのだといえよう。

### おわりに

山寺常山に関する伝記的記述が、明治一七年の碑文以来大きく変わっていないことに示されるように、これまで常山についての研究は、その知名度に比してほとんど行われてこなかった。その背景には、戦後、研究の素材となりうる常山関係史料がほとんど見出されてこなかったことがあるが、真田宝物館に山寺家文書が収蔵され、飯島忠夫の『山寺常山伝』の存在が明らかになったいま、常山研究の環境は整いつつある。本稿ではこれらを用いて、今後の研究の進展を期し、明治期以来の常山伝記・研究を紹介する意図も込めて、常山像の形成について若干の検討を行ってきた。以下、今後の課題について簡単にふれておきたい。

まず第一に、現在は、常山関係史料に関する基礎的考察を進めていくことが研究の基本として不可欠な段階にあると思われる。本稿もそうした作業の足がかりの一つとすべく執筆したものであるが、山寺家文書等の現存史料についてはほとんど触れられなかった。常山関係史料の研究に関しては、所在不明の遺稿類の掘り起こしが今後の大きな課題であることはもちろんだが、その他にも課題は多く残されている。まず、真田宝物館に収蔵された七〇〇点以上に及ぶ山寺家文書の存在である。そこには江戸期以来の常山および同人宛書簡が多数含まれており、相当数の漢詩文（信炳のものも多い）、拓本類や図画等が残されている。山寺家文書の内容分析は常

山研究の主要な柱であるといえよう。第二に、これまで十分活用されてこなかった「常山先生年譜」や『山寺常山伝』の内容を改めて精査することである。特に、翻訳した史料を多数掲載した後者は、原史料を確認できない(ものが多い)ことに十分な注意を要するものの、常山研究にとって不可欠の文献であるといえよう。第三に、真田宝物館塩野家文書に、若干の常山関係史料が残されていることである。特に、塩野季彦が筆写した『常山先生詩稿』一、六は、文政、明治期の常山の主要な漢詩を網羅しており、これによって、「常山先生年譜」・『山寺常山伝』記載の漢詩と照合し常山遺稿のうち漢詩の全容を窺うことも可能となる。また、東京大学史料編纂所収蔵の『如坐漏船居紀聞』をはじめ、各地の収蔵機関に残された常山関係史料の追跡も重要な課題である。今後、これらについて、丹念な考察を積み重ねていくことが必要となろう。

次に、一で言及した明治期以降の常山顕彰の動向の検討も重要な課題である。特に、本稿で十分踏み込めなかったこととして、明治一七年および昭和一五年の建碑とそれに関わる書物出版などの一連の事業が持つ歴史的な意味をいかに読み解いていくか、ということがある。これに関しては、佐久間象山顕彰事業や町史等の編纂、信濃教育会の活動等との関連性を十分視野に入れ、時代の中に位置づけていくことが求められるといえよう。

最後に、本稿では、幕末、明治期にかけての常山への評価(常山像)が、「寛政維新」の継承意識およびそれに基づく人的関係や諸政策の実行と密接な関連を有するものと想定しうることを指摘した。やや飛躍するけれども、このことは、一八世紀後半の幕藩政治改革とそれに対する評価・イメージが、常山像もその一角を構成したものと想定される松代内外の地域意識にまで影響を及ぼしていたことを示唆しているようにも思われる。膨大な検証作業が必要な粗い見通しではあるが、ともあれ、人々の意識・思想を軸に、政治と地域社会の関係を近世・近代双方に目を向けて見通そ

うとする際、山寺常山という人物は興味深い検討対象となりうるものと考えられる。常山に関する基礎的研究が一層進展することを期待して擲筆したい。

〔付記〕本稿の作成にあたって、真田宝物館山中さゆり氏に、多くの便宜を与えていただいた。記して感謝申し上げたい。

〔参考資料1〕『三百藩家臣人名事典』三(新人物往來社、一九八八年)

山寺常山(やまでらじょうざん) 文化五年(明治十一年(一八〇七)一八七八)

松代藩の学者・重役。佐久間象山、鎌原桐山とともに、松代藩の三山の一人。通称は源大夫。名は久道、信竜、字は子彰。懼堂、静修斎、常山と号した。山寺氏の祖は、竹田典、てんきゅう信繁(信玄の弟)の臣山寺佐五右衛門である。その子庄左衛門久繁が真田昌幸に仕え、以来代々百四十石で真田家に仕えた。常山の祖父は久好、父は久敬である。幼時に母を失い、祖父に育てられたという。真田幸貫に仕え、監察、普請奉行、世子傳などの職を務めた。この間江戸に出て、兵学を平山兵原に学び、経書を古賀侗庵に学んだ。また、松崎謙堂、佐藤一斎、中村敬宇らと交わる。天保四年儒者長野豊山を松代に招き、城中で孟子を講義させた。天保十二年真田幸貫が幕府の老中となって海防を担当すると、常山は藩士に兵学を講じた。天保十四年には郡奉行となり、幕府より功を賞されて白銀を与えられた。弘化四年の善光寺大地震の対応にも功があり、俸禄を増された。嘉永五年真田幸教が藩主となると、側役頭取となる。安政元年黒船が二度目の来航をすると、常山は佐久間象山とともに開港問題に奔走した。文久三年の英国軍艦の来航には、藩の参謀として江戸に赴き、幕府諸藩の間で活躍した。明治三年藩内に藩札をめぐる騒動が勃発すると、藩知事真田幸民のもとで政務に当たり、その処置に功があった。明治十一年七月三日没した。著書に『常山文集』『如坐漏船居紀聞』『松代封内実測図』がある。明治十七年長野市城山公園に、「常山山寺先生之碑」が建てられた。夫人鎮子は藩の学者北澤蘭壑の二女で、書画に秀でていた。長男信炳と三男宣健は司法官となった。宣健の子塩野季彦は司法大臣を務めた。

〈参考資料2〉「山寺常山先生年譜」より「常山山寺先生碑」

常山山寺先生碑

東京大学教授従五位中村正直撰 従五位長英書

修史館副総裁従二位勲二等伊達宗城篆額

先生、諱は久道。後、信龍と改む。字は子彰。源姓。山寺氏。源大夫と称し、常山と号す。世々松代侯に仕ふ。王父、諱久好。先生幼にして孤となり、王父に養はる。長ずるに及びて器宇峻整。好んで書を読みて大要を綜べ、慨然として古の俊傑を以て自ら命ず。甫めて冠を踰え、擢でられて監察と為り、普請奉行、世子傳等の官に累遷す。其の間、或は江戸に于役して、兵を平山兵原に学び、経を古賀侗庵に問ひ、或は封内の山川を巡り、招提を過ぎれば禪衲を訪ひ、毎に良辰美景に遇へば、留連して詩酒す。蓋し経済と風流と両ながら之を兼ねたり。是の時、感應公賢を好み才を愛し、長野豊山、林鶴梁の如きは賓礼を以て遇せらる。而して其の臣に文学の士多く、鎌原桐山、佐久間象山、之が巨擘たり。先生既に已に資りて以て切磋し、而して又、松原慊堂、佐藤一斎等と交を締ぶ。意は智識を開擴して以て君に致し民に澤するに在るなり。

天保十二年、公、閣老と為り海防の事を管る。先生益々兵学を講じて藩士を率励す。十四年、郡奉行と為り、預所郡奉行を兼ね、力を盡して賭博を禁じ、閭閻肅清せしかば、幕府賞して白銀を賜へり。弘化四年、信濃の地大に震ひ、死する者数万、先生賑恤して方ありしかば、俸禄を増されたり。文聰公、封を襲ぐに及び、先生は側役頭取を兼ね、啓沃する所多かりき。安政元年、米舶入港して物議騒然たりしとき、先生、長岡監物、藤田東湖等と画策する所ありしも、未だ施さずして通好の議決せり。文久三年攘夷の命下りしとき、先生は参謀と為りて江戸に赴き、幕府諸藩の間に奔走し、慷慨して事を論ぜり。予の先生識れるも亦此の時に在り。何くも無くして左遷せられ屏居すること三載なりき。明治二年、朝議先生を徴しに、故ありて出でざりき。三年、松代管下騷擾せしとき、知藩事眞田幸民、先生を挙げて仮に政務に参せしめしかば、民心始めて安かりき。先生、宦に仕ふること殆ど五十年、政績卓然として伝ふべし。晩年豪氣猶屈せず、其の文辞に発するもの蔚然として観るべし。十一年七月三日病歿す。生、文化五年を距てて年を享くこと七十有一。著はす所、常山文集、如坐漏居紀聞、松代封内実測図あり。配は北澤氏。子は六人あり。信炳、時秀、宜健、義風といひ、他は夭す。信炳家を嗣ぐ。今茲、先生の故旧門人、碑を長野城山に樹て、予に属して銘を為らしむ。誼、辞すべからず。之が詞を為りて曰く。

予、君を識る。軀幹偉なり。眼光炯として、風采秀でたり。意恢廓にして、度量あり。循吏と為りて、名望崇し。時艱を憂へて、常に蒿目す。交際を広くして、啓沃を尽す。斯の人の如きは、大丈夫。千秋に諒けて、辞に諛ふことなし。

明治十七年二月建つ。

註

- (1) 原田和彦「佐久間象山像の成立をめぐって」(『信濃』六〇―八、二〇〇八年)、降幡浩樹「佐久間象山の顕彰活動について」(『松代』二六、二〇一一年)。また、山中さゆり「大平喜間多の著作とその活動」(『松代』一九、二〇〇五年)等。人物顕彰をめぐっては、高田祐介「国家と地域の歴史意識形成過程」(『歴史学研究』八六五、二〇一〇年)、宮間純一「明治・大正期における幕末維新期人物像の形成」(『佐倉市史研究』一二、二〇〇九年)、伴野文亮「金原明善の『偉人』化と近代日本社会」(『書物・出版と社会変容』一六、二〇一四年)、阿部安成「直弼／象山／忠震(一―三)」(『彦根論叢』三七〇・三七三・三七五、二〇〇八年)はじめ、近年多くの研究が発表されている。
- (2) 松代藩地域を対象とした共同研究によって同藩における学問受容と藩政展開の関係性が明らかにされつつある。渡辺尚志他編『信濃国松代藩地域の研究』I―IV(二〇〇五―一四年)。
- (3) 歴史人物の顕彰については近世近代の地域意識とも関連していよう。若尾政希・菊池勇夫編『覚醒する地域意識』(吉川弘文館、二〇一〇年)、「特集近世日本の地域意識を問う」(『歴史評論』七九〇、二〇一六年)。
- (4) 飯島忠夫「山寺常山先生に就いて」(『信濃教育』六五一、信濃教育会、一九四一年)。
- (5) 『塩野季彦回顧録』(塩野季彦回顧録刊行会、一九五八年)。
- (6) 以上は、飯島忠夫「緒言」、および塩野季彦「後記」による。

(7) ただし、飯島忠夫が閲覧していないと考えられる常山関係史料として、常山の著作の一部や蔵書がある。塩野季彦「後記」によれば、『如坐漏船居紀聞』『懼堂雜纂』『兵要録』は、季彦の父宜健の時から塩野家で保管していたとされ、後二者は関東大震災により烏有に帰してしまったという（前者は東京大学史料編纂所に現存）。また、「土手三番町の山寺の家、屋敷は其蔵書の一部を学習院に売った代金で買入れたとのことであった」ともいうから、『山寺常山伝』執筆時には、万巻に及ぶと言われた常山蔵書の全てが揃っていたわけではないことが分かる。

(8) なお、この時建てられた石碑は長野市城山に現存しており、現在山寺常山邸に立つ「常山山寺先生碑」は、常山の孫にあたり司法大臣を務めた塩野季彦と司法関係者の発起により、昭和一五年に新建されたものである。

(9) 真田宝物館山寺家文書N-164。

(10) 北澤の事跡に関しては、岩生成一「忘れられた歴史・地理学者北澤正誠」（『日本学士院紀要』四二巻一、一九八七年）、原田和彦「佐久間象山関連資料について」（『松代』一九、二〇〇五年）、原田前掲「佐久間象山像の成立をめぐる」等参照。

(11) 以下、飯島忠夫『山寺常山伝』による。

(12) 飯島忠夫「題言」（天籟社編纂『山寺常山先生年譜』信州書屋、一九四〇年）。

(13) 原田前掲「佐久間象山関連資料について」。

(14) 飯島忠夫『山寺常山伝』一六三丁。

(15) 岩生前掲「忘れられた歴史・地理学者北澤正誠」。

(16) 山寺家文書に残された中村正直書簡には、「北澤正誠君嘗而御持参御頼ミ」により「佐久間君碑、高文を塗抹削去し」たこと（年月日不詳山寺信炳宛、M-1四-13-1-1）や関係者（常山子息カ）を「北澤氏江御托しニ相成」ったことと言及したもの（年不詳六月一日付山寺常山宛、M-1四-13-1-2）が見られる。

(17) 岩生前掲「忘れられた歴史・地理学者北澤正誠」。

(18) なお、建碑の担い手という点に関しては、昭和一五年に山寺常山邸に碑を新建

することとなった際、更級郡八幡村の武水別神社の神職松田氏に保存されていた長三洲書の碑文原本を用いたとされていることが注目される（飯島忠夫『山寺常山伝』一九四〇年）。関連して、更級郡若宮八幡の神職松田豊前は、明治元年一二月七日、朝廷要路に対し常山の登用を薦めた言上書を送っている（後述）。これらのことから神職松田氏の存在は、建碑や常山像の形成、さらには幕末維新期の常山の思想・行動の考察にとって相当の重要性を持っていると思われる。今後の検討課題としたい。

(19) 参考資料1・2参照。「常山山寺先生碑」以来、常山の著作として言及されるが、所在不明で成立事情等も伝えられていない。年譜作成の過程で北澤正誠が編集した可能性も残されている。

(20) なお、「松代三山」という言い方をめぐっては、例えば關口龍夫『小布施村一村の壮年團史』（報道出版社、一九四三年）が「幕末の信濃三山」として山寺常山、佐久間象山、高井鴻山がある」といい、『山寺常山小伝』（一九四〇年）も同様の認識を示しているように、戦中期まで「信濃三山」という認識が見られたことに留意して用いる必要がある。また、飯島忠夫は、「松代三山」「信濃三山」よりも、常山・象山に長谷川昭道を加えて「松代三傑」と呼ぶことを提唱している（飯島前掲『山寺常山先生に就いて』）。いずれにせよ、幕末期以来、常山・象山が併称されていることは見落とせない点である。

(21) 民政に関して常山は、「聴訟之職を汚す、前後十有八年、大小五千件之公事に於て、いまだ一謬誤有之と申噂は不承及一候」（表1-55）との自負を示している。また、こうした常山の民政面の実績が、松代内外で高く評価されたこと（史料1「重線部や」「乍不肖、感応公御余光ヲ以、二十余年ノ久敷、民事ノ職ヲ奉ジ候故、庶民ハ勿論、四隣迄も虚名相伝へ：」表1-66、『山寺常山小伝』四三頁にも所収）は本稿の考察にとって重要であるが、紙幅の関係から割愛せざるを得なかった。別稿を期したい。

(22) 「使無」は『論語』顔淵第十一の「必也使無訟乎」の語を典拠とする。

(23) 小関悠一郎「明君像の形成と「仁政」的秩序意識の変容」（『歴史学研究』九三七、二〇一五年）参照。

- (24) 原本は、真田宝物館山寺家文書N―1。
- (25) 小関悠一郎「真田家の系譜・事蹟編纂と鎌原桐山の思想」(前掲『信濃国松代藩地域の研究』II)。
- (26) この点については別稿の発表を予定している。参照されたい。
- (27) 軍議役として江戸に出た文久三年には彼らと文芸・時事を論じたと言われ、また「与古賀茶溪・林鶴梁・安井息軒・田口江村・中村敬宇」書」(表2、明治四年)等の詩文も残されている。
- (28) 小関前掲「真田家の系譜・事蹟編纂と鎌原桐山の思想」。
- (29) ひとまず『北信郷土叢書』七巻による。
- (30) 事実、徳川斉昭は、幸貫や松浦静山(平戸藩主)・大関増業(黒羽藩主)らと交わり、幸貫らを天下の三良友として厚遇し(真田宝物館所蔵の「感応公併黒羽平戸二侯肖像徳川斉昭賛」(天保一年)は、斉昭が幸貫・静山・増業を自邸に招いた際の様子を描かせ、幸貫宛斉昭書状・幕府儒官佐藤一斎賛を付している)、声望高かった幸貫とは、鍋島斉正(佐賀藩主)・島津斉彬(薩摩藩主)ら諸大名が交わったと言われる(大平喜間多『海防の先覚者真田幸貫伝』昭和刊行会、一九四四年)。
- (31) 信濃教育会編『増訂象山全集』第三卷(信濃毎日新聞社、一九三五年)二九〇頁。
- (32) なお、当該期の藩政改革に関しては、上杉治憲(鷹山)による米沢藩政改革が重要である。真田宝物館収蔵の真田家伝来の典籍の一つとして『翹楚篇』(上杉鷹山明君録)があるが、その上段余白には「桐山先生曰…」といった書き込みが見られ、桐山らが共同で同書を読んでいたことが窺われる。また、常山が交わった藤田東湖や長岡監物、村上量弘、林鶴梁らはいずれも上杉鷹山を評価する言辞を残している。